

生徒の課題解決に基づく教育改善プログラムの開発的研究

高度学校教育実践専攻
教育実践力高度化コース
滝浪 貴史

実習責任教員 久我 直人
実習指導教員 大林 正史

キーワード: 勇気づけ, 自己肯定感, 学校組織, マネジメント

I 課題分析

1. 課題設定の理由

(1) 置籍校の概要と課題

1) 置籍校の概要

置籍校は、昨年創立40年を迎えた全日制普通高校である。3学年ともコース制になっており、総合コース特進クラス1クラス、総合コース普通クラス4～5クラス、体育コース1クラスの編成となっている。生徒数667人、教員数66人である（平成29年4月現在）。

2) 置籍校の課題

生徒・教員対象のアンケートを中心に、生徒のよさと課題を把握するため、学校アセスメントを実施した。表1は抽出された課題を分類したものである。

表1 置籍校の課題

生徒	学習習慣、計画性が弱い
	自分への信頼が低い
	認められている感覚が弱い
教員	具体的な学び方指導の必要性
	学校の課題の共有
	生徒への個別の勇気づきの必要性

生徒の行動面の課題と内面の課題の構造的な関係を理解するために、生徒アンケートの結果を共分散構造分析ソフトAmosで分析し、「生徒の意識と行動の構造」を可視化して、生徒の行動と内面の関連性を導き出した（図1）。

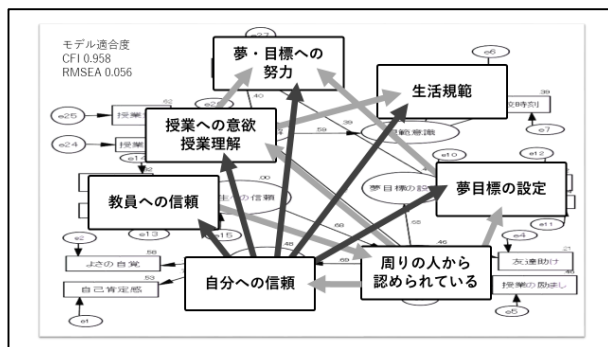


図1 生徒の意識と行動の構造図

(2) 実践研究の目的

学校アセスメントを通して明確になった学校課題は、個別の課題ではなく、それぞれが関連したものである。本実践研究は、これらの課題を解決するため、生徒が抱える教育課題の解決のための取組を、組織的に展開することを通して、生徒の変容と教員の組織化を図ることを目的とした。

(3) 実践研究の課題

本実践研究の目的を達成するため、次の課題を設定した。

- ① 置籍校の教育課題の可視化
- ② 教員の組織化と教育改善のためのプログラム構築
- ③ 構築したプログラムの具体的な実践
- ④ プログラムの効果の検証

2. 実践研究の枠組

(1) 実践研究の具体的な取組

置籍校生徒の意識と行動の構造図（図1）を基に、具体的な取組を策定した（図2）。

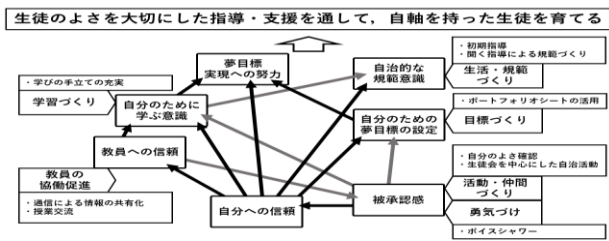


図2 課題解決に向けた具体的な取組図

【勇気づけに関する取組】

日常的なボイスシャワーを行うことを策定し、すべての取組において、互いを励まし勇気づけることを基本とした。

【目標・学習づくりに関する取組】

Question Week や学習計画表による学習習慣づくりを策定した。また目標設定と振り返りのため、「R&A シート」等の活用を計画した。

【生活・規範づくりに関する取組】

「人の話を聞く指導の徹底」が設定された。また初期指導でのルールと価値づけの明示がなされ、日々の振り返りの中で継続的な意識化と実践化を促進することが計画された。

【活動・仲間づくりに関する取組】

エンカウンターを利用した仲間づくり、自分のよさを確認する活動が策定された。また生徒会活動を活発化し、自分たちの環境を自分たちの手でつくっていく、という自治意識を育てていくことを計画した。

(2) 組織マネジメントの展開枠組

本実践研究を実施するにあたり、久我(2013)「教師の主体的統合モデル」を基に、実践研究における組織マネジメントの展開の枠組を作成した(図3)。

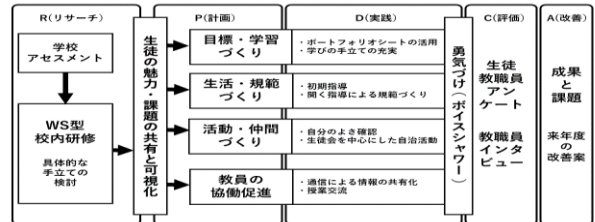


図3 実践研究における展開の枠組

II 課題解決

1. 実践研究の実施

(1) Research 期

平成29年2月10日に全教員を対象にした校内研修を実施した。内容は組織的省察を促す久我教授の講演、学校アセスメントデータの共有、組織的省察(ワークショップ型研修)である。組織的省察では、学校課題に基づいた教育活動づくりのアイデアが出された。

(2) Plan 期

組織的省察の結果を踏まえ、置籍校の教育課題の解決に向けた具体的な取組を策定し、取組が組織的に展開されるよう、各取組に担当課を位置づけ、展開イメージをまとめた(図4)。

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
進路計画に基づいたステージ設計	生活基礎構築ステージ		目標設定ステージ		生活再構築ステージ	学びの充実ステージ	チャレンジステージ		未来目標再設定ステージ			
目標・学習づくり 進路課 教務課	ポートフォリオシートを活用した 目標設定と振り返り											
生活・規範づくり 生徒課	学習実行表とQuestion Weekを利用した 学びの手立ての充実											
活動・仲間づくり 生徒課 教育相談室	初期指導	聞く指導による規範づくり				リスタート指導						
勇気づけ 全教員	自分のよさを確認		自分のよさを確認									
教員の協働促進	生徒会・専門委員会を中心とした自治活動				新体制生徒会・専門委員会を中心とした自治活動							
	ボイスシャワー・ポジティブフォーカス											
	通信を利用した情報共有											
						授業交流		授業交流				

図4 組織的展開イメージ

(3) Do 期

1) 生活・規範づくりに関する取組

【初期指導】

学年集会を要のひとつとし、高校生としての心構えと規範意識を高めた。また学習のルールづくりによって、学習面の規範も確認された。

【聞く指導】

2学期の再スタート指導として、「聞く」について校長、生徒課長が全校生徒に向けて話をし、学校全体で一貫した指導を行っていくことが印象付けられ、規範意識の高まりに繋がったととらえられた。

2) 活動・仲間づくりに関する取組

【生徒会・専門委員会の主体的な活動】

平成29年3月に生徒会本部、専門委員長がそれぞれ学校づくりに関するワークショップを行った。これにより自治活動における主体性、計画性の向上に繋がったととらえられた。

【仲間づくりのエンカウンター】

4月当初に、生徒が安心できるクラスづくりを目的としたエンカウンターが実施された。生徒から、クラスの雰囲気がとても明るく感じられた、といった感想が多く出され、被受容感の高まりに繋がったととらえられた。



図5 仲間づくりのエンカウンターの様子

【自分のよさ確認ワークショップ】

行事の振り返りとして、それぞれの頑張っていた様子をワークシートに書き出し、グループで交換した。頑張っている姿を見てくれて嬉しい、という意見が多く、受容される喜びに繋がったととらえられた。

3) 目標・学習づくりに関する取組

【学習計画, 学習記録】

各学年の状況にあわせた計画・記録表が用いられ、計画的な学習習慣が促され、学習意欲、理解の向上に繋がったととらえられた。

【自分の持っている力・評価シート】

社会人基礎力をベースにしたシートを用いて、自分の持っている力を整理した。「進路に対して、どの力が必要か考える機会になった」という感想が出され、目標づくりのきっかけになったととらえられた。

【R&Aシートによる振り返り】

学期ごとの自分の様子を振り返り、次の目標を設定した(図6)。記入したシートは、三者面談等でも利用され、目的意識の醸成に繋がったととらえられた。

R&Aシート		達成開始日 (自己評価日)	評価
【学 習】	英単語帳を最初から最終までやり終える。	8月30日	
【生 活】	不規則な生活をしたい。 規則正しい生活をしたい。	3月1日	

自分のこれまでをReflection(振り返り)、Action(行動に移すためのシート)として記入する。HRNO()氏名()記入日:(2017)年(7)月(14)日

○自分の具体的な進路目標を書こう。

進路目標 自己PR、発表をレギュラーでやるようにしたい
目標への思い 面接の短い時間の中で、レギュラーで発表できるようにしたい。発表の準備を毎日練習する。

○自分のがんばったこと(人が言ってくれたことも含めて)を書こう。

勉強面 宿題の管理システムが少しうまくいって、勉強の時間が増え、時間を有効に使えた。
生活面 3年生になったことが「静か」な学校生活で、いい目標を達成できたこと出来た。

○自分の得意なこと(持っている力)を書こう。

音楽部で部長をやったこと。部員から、マネージャーの役割を任せられて、責任が重かったが、自分自身も、部長としての責任をしっかりと果たすことができた。

○自分の得意なことを、やりたい自分の姿を具体的に書こう。

1人1人個性が活発で、自分も個性を伸ばして、自分自身も個性を伸ばすことができるようにしたい。

○自分の得意をさらに伸ばし、やりたい自分を目指すために、今自分が最優先すべきことを具体的に書こう。

図6 生徒が記入したR&Aシート

4) 勇気づけに関する取組

【ボイスシャワーメッセージの掲示】

行事での生徒の頑張りに対する教員や保護者のメッセージが掲示され、生徒の被受容感を高める一因となったととらえられた。

5) 教員の協働促進に関する取組

【授業交流による協働促進】

授業交流Weekが2回実施され、自由に授業参観を行った。そこから見えてきた授業のよさや課題は職員会議で共有され、教員の授業改善と協働促進が促されたととらえられた。

2. 実践研究の総括

(1) 生徒の変容

本実践研究の結果、夢・目標への努力、学習意欲・理解、規範意識、自治意識、自分への信頼の各項目で変容傾向が確認された(図7)。

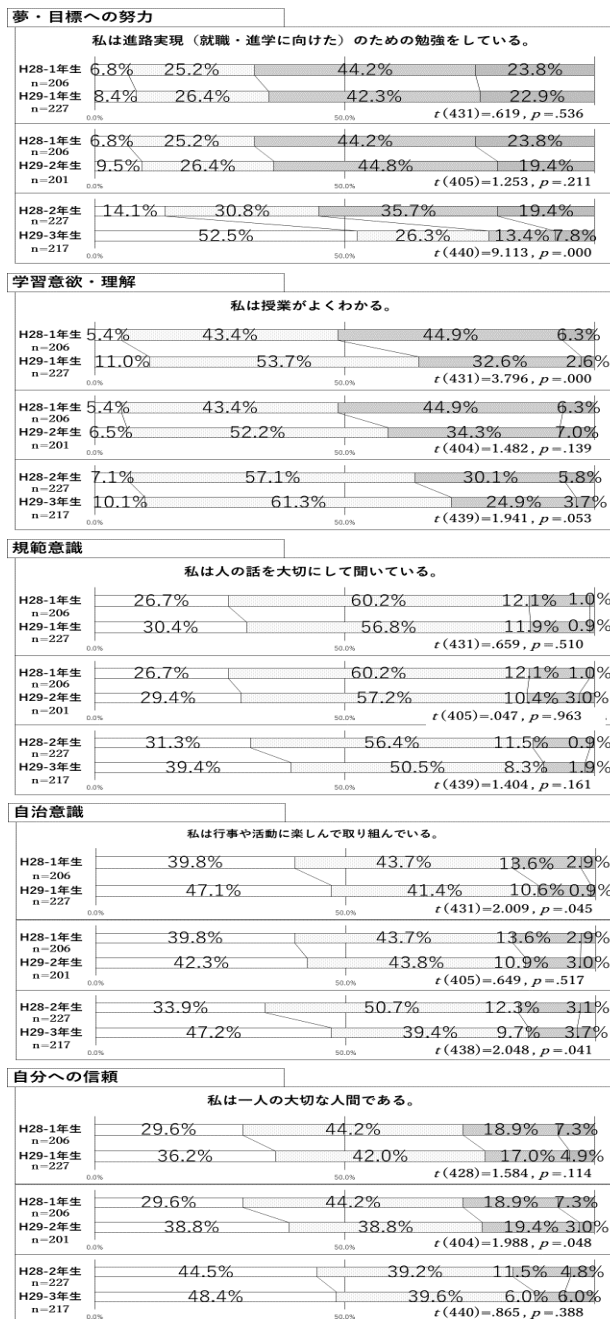


図7 生徒アンケートの結果

(2) 教員の変容

教員は、生徒の学習意欲・理解に繋がる学習

指導・支援、生徒の被受容感に繋がる生徒への価値づけの向上とともに、教員の協働性に変容傾向が見られた(図8)。これは、全教員で教育課題を共有し、学校全体で組織的な取組を行ったことが要因のひとつであると考えられた。

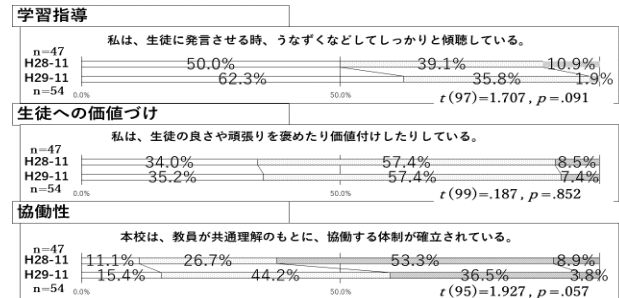


図8 教員アンケートの結果

(3) 実践研究の成果

本実践研究の成果として、次の8点が挙げられる。①生徒の被受容感の高まりが確認できたこと。②生徒の「自分への信頼」の高まったこと。③生徒の学習意欲、学習理解の向上が見られたこと。④生徒の目的意識の醸成が確認できたこと。⑤生徒の自治意識が醸成されたこと。⑥生徒の規範意識の高まりが見られたこと。⑦教員の指導の質的改善が図られたこと。⑧教員の組織化が促進されたこと。以上のことから、本実践研究の目的は一定程度達成されたと考えられた。

(4) 今後の課題と展開の可能性

本実践研究では、生徒の意識と行動の構造を明らかにし、基底課題である「自分への信頼の低さ」に対して、「勇気づけ」を軸とした組織的な取組を展開した。生徒の諸問題(行動レベル)だけに注目して、その解決を目指すのではなく、生徒の意識(内面レベル)に焦点をあて、改善策を生成することの有効性を示したと言える。本実践研究の教育改善プログラムは汎用性が高く、様々な教育課題を抱える学校で有効に機能すると考えられる。